

対面コミュニケーションに苦手意識がある児童への オンライン交流学習

— 通級指導教室における実践を中心に —

方波見直也¹ 佐藤 慎二²

Online Activity Support for Children with Special Needs at communication

KATABAMI Naoya SATO Shinji

言葉のやり取りの苦手さコミュニケーションに対する自信のなさから、人とのやり取りにおいて消極的な児童のために、ICT機器を活用したオンライン交流学習を行った。これまでもオンラインの場面であれば自己表現ができていたが、「相手を見る」等の基本的なやり取りも含めて成長が見られ、オンラインだけでなく、通常の学級における対面でのコミュニケーションの自信にも繋がった。他3名の児童へのオンライン交流学習の結果も踏まえ、オンライン交流学習やICT機器の有用性・活用性を指摘した。あわせて、オンラインやその録画を活用する通常の学級と通級指導教室との連携を促進する可能性が示唆された。

キーワード：コミュニケーション、オンライン、通級指導教室、交流学習

1 問題と目的

第3期千葉県教育振興基本計画の基本目標1の施策4に、「共生社会の形成に向けた特別支援教育の推進」—(1)「連続性のある多様な学びの場と支援の充実」と示されており、その具体案として「ICTを活用した教育の推進」や「通級指導教室における支援の充実」が指摘されている。これからの時代、特別支援教育においても、児童がICT機器を多様な学びの場で効果的に活用し、学びを深めていく必要があると考えられる。また、第3次千葉県特別支援教育推進基本計画では、「ICTの活用による教育の質の向上」において「Web会議システムを活用した遠隔教育の推進」が示されている。遠隔教育を取り入れた教育活動の追求は時代の要請の一つとなっている。

所属校ではこれまで通級指導教室を担当してきた。その中で、自分の思いや考えを伝えることを苦手としている児童と出会ってきた。原因として、コミュニケーションに対する苦手意識や対面での会話

のやり取りの困難さなどが挙げられる。具体的には、自分のペースで一方的に話をする児童、相手を意識した言葉遣いが苦手な児童、友達とは交流ができて教師には緊張して上手に話ができない児童、他者に対して非常に消極的な児童など様々である。

これらの課題に対応するために、これまでにオンライン交流学習を試みてきた。オンライン交流学習とは、同じ時間帯に通級指導教室に通う児童(2～3人)が、校内の理科室や少人数教室等の空き教室に移動し、対面ではなくオンラインで繋がり、会話やチャット、ゲームなどをする活動である。児童は画面越しのやり取りにおいても、「相手を意識する」「会話の順番を守る」「ジェスチャーを交えて交流する」などのコミュニケーションを取ることができた。それらの活動を通して、児童が興味関心をもつICTを活用することで意欲的に取り組めたり、自分だけの空間があることで周りの視線を気にせずに活動したりすることができる良さが指摘された。しかし、オンライン交流学習には先行研究が少なく、実

1 香取市立佐原小学校

2 植草学園短期大学

践例が豊富にあるわけではない。

そこで、本研究では、まず通級指導教室を起点にオンラインの交流学習の充実を図る。その上で、児童が他者とのやり取りに対して自信を付けたり、在籍する学級で自分の考えを相手に伝えたりする機会を増やしたい。それにより、オンライン交流学習によるコミュニケーション指導の工夫を明らかにすることを目的とする。

2 研究 I (聞き取り調査)

2.1 目的と方法

令和4年7月下旬から8月中旬に県内4校の学校の通級指導教室(LD・ADHD等通級指導教室、自閉症・情緒障害通級指導教室)担当の教師に表1のような聞き取り調査を行った。目的は実際に対面で聞き取りを行い、オンライン交流学習に対する意識や教室環境などを把握することである。

表1 聞き取り調査の内容(一部抜粋)

通級指導教室全般について	
3	通級担当の先生が日々の指導の中で課題を感じていることはあるか
コミュニケーション・ICTについて	
7	オンライン交流学習を自立活動として取り入れる事ができると思うか
教室環境について	
8	どのような教室で通級指導を行っているか

2.2 結果と考察

2.2.1 オンライン交流学習に対する意識

図1は「オンライン交流学習を取り入れることが可能と思われる児童の数」を示している。どの学校にもオンラインの交流学習に興味をもつ児童がいることが分かる。

A小学校は今年度からLD・ADHD教室が新設され、現在はLDのみの児童しか在籍していない。そのため、読む・書く・計算することに困難さを感じている児童にとっては、オンラインの良さは活かしにくいことが考えられる。

B小学校はICT研究校であったため、ICT機器を活用することに対して非常に前向きであった。また、児童が意欲的に活用して取り組んでいるタブレットのアプリケーションを紹介してもらった。

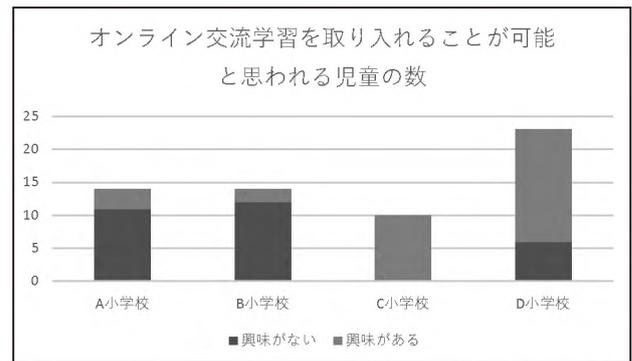


図1 オンライン交流学習への意識

C小学校は自閉症・情緒障害通級指導室であったため、ICT機器への意欲の高さは、他の学校に比べて高さが感じられた。そのため、「ヘッドフォンのコードなどは、児童の集中の妨げになる可能性がある」という具体的な指摘もあり、身の回りの学習環境を整える重要性が指摘された。

D小学校は、昨年度オンラインの授業実践を既に行なっていた。そのため、通信環境の違いやスケジュールを合わせることの難しさなどオンラインにおける自立活動の実践について具体的な示唆を得ることができた。D小学校の実践は、今年度の自立活動を構築していく上で非常に参考になる情報を多く得ることができた。

2.2.2 教室及び環境要素

それぞれの学校によって通級指導教室の形態は様々であった。広い教室で指導を行う学校や教室内にドア付きの個別の学習スペースがある学校など、学校の実態に応じて児童が学びやすい工夫がされていた。

A校はとても広い通級指導教室がある。A校規模の教室の広さがあれば1つの教室内でオンラインによるやり取りをすることが可能である。

B校はICT研究校であるため通級指導教室の児童も含めて、ICTに対する意識が高くタブレット端末などを活用しやすい状況がある。

C校は教室中に、個別学習スペースが2部屋、扉で仕切られている。他の教室に移動しなくても個別の空間を作ることができる。

D校はオンライン交流学習の実践はあったが、相手校の指導者との間のICTに関する意識や技能の差など、担当者のICTのスキルの違いも無視できない要素としてあげていた。

このようにオンライン交流学習を取り入れる際には、環境面を整えることも大切である。それぞれの学校の実態に応じたオンライン交流学習の取り入れ方も検討していく必要があると言える。

2.2.3 その他

担任との連携、児童の障害の特性による指導方法の違い、担当している人数の多さなども指摘された。

通級指導教室では通常の学級との連携の必要性が指摘されている。しかし、実態は連絡ノートの活用や放課後に意見の共有をするなどが主な連携方法となっているが現実には制約が多い。その点、オンライン交流学習では、録画機能により、好きな時間に通常の学級の教師も児童の活動の様子を確認することができるため、連携を図っていく上での貴重なツールとなり得るのではないかと考えられた。

3 研究Ⅱ－A児について

3.1 A児及び関係者へのアンケート調査から

表2はA児の他者との関わりに関する様子である。学級では一人で過ごすことがほとんどである。また、会話のやり取りの中でも意思疎通がうまくいかず、唐突に他の話をしたり、こちらが理解してなくても自分の話を一方的に話したりしていることも多くある。この際に、相手の方を見ずに視線がいつも違う方向を向いていることが多い。授業の中の、グループ活動なども消極的である。一方、家庭ではオンラインゲームを通して、マイク通話を活用

表2 アンケート・聞き取り調査結果

質問	回答	回答者
他者との関わりについて	クラスの友達とあまり話さない	本人
	休み時間は一人で過ごすことが多い	担任
	会話の意思疎通がうまくいかないことがある	通級担当
	学校では一人で過ごすことが多いと聞いている 家ではオンラインゲームで、友達と流暢に喋っている	保護者
	授業でグループ活動があっても友達と関わらない TVゲームの内容なら教師と会話弾むことが多い	行動観察(長研生)

しながら、友達と流暢に話し楽しく過ごす一面がある。TVゲームや自分の好きなものに対して話をするときは、自信をもって話をする事ができることが多い。

3.2 A児の様子について

A児はWISC-Ⅳの結果から知覚推理と処理速度の高さがあり、言語理解とワーキングメモリの低さがみられる。また、自閉的傾向があり周囲の視線を強く意識したり、他者との関わりに消極的だったりする面が見られる。

表3から休み時間は基本的に一人で過ごしていることが分かる。授業中も自分から他者と関わろうとはしない。また、課題の提出をする場面等で、自分が何をすべきか把握していない際に、どうすれば良いのかを自分から友達に聞きに行く姿は見られない。

一方で、クラブ活動では、通常の学級と違い少人数の環境であったり、自分が興味関心をもつ活動であったりしたため積極的な様子が見られた。

表3 行動観察にて記録された様子

6/6	休み時間 授業中	・席に座って何をするわけでもなく、静かに過ごしている。 ・グループ活動では特に誰とも話さない。教師が「相談してもいいよ」と聞くが、誰かに何かを聞く様子はない。
7/4	クラブ活動	・タイピングクラブ(パソコン教室) ・隣の友達の眩きに対して、「そうだね」と反応する。 ・「先生何をやればいいですか?」と自分から担当教師のところへ行く。
7/19	業間休み	・タブレット学習のアンケートをやっている。アンケートが終わっていないようだったが、ローマ字による文字入力にかなり時間がかかるので、アンケートが終わらない。 ・困っていても誰かに助けを求め様子はない。

3.3 A児に対する指導の方向

アンケートや行動観察の記録からA児が学校で他者と関わりをもつためには、コミュニケーションに対する自信の深まりとともに、相手を見る等の基本的なやり取りを行うための技能が必要であると思われる。そのため指導計画を立て、全てオンラインによる活動で行った。

3.4 実践研究

3.4.1 目標—①相手の方を見る、②傾きながら聞く、③やり取りを楽しむ

3.4.2 内容と方法—自立活動 1回20分を9回実施する。8・9回目は他市と交流する。以下は20分1単位時間の主な流れである。授業では、主に「質問タイム」と「ミニゲーム」を行う。質問ゲームでは、相手の方を見ることや傾くことを意識的に行い、ミニゲームでは、人と関わるのが楽しくなるように活動を行なっていく。以下は指導計画である。(表4)

表4 指導計画

回数	指導日	活動のねらい
1回目	9月7日	パソコンの操作を覚えよう
2回目	9月8日	相手に質問することを考えよう
3回目	9月13日	相手に質問をしてみよう
4回目	9月15日	相手の方を見て話そう
5回目	9月20日	相手の方を見て話そう2
6回目	9月22日	うなずきながら聞いてみよう
7回目	9月29日	うなずきながら聞いてみよう2
8回目	10月7日	聞き取り名人になろう
9回目	10月28日	上手に伝えよう

3.4.3 指導上の工夫

A児が意欲的に取り組めるようにゲーミングヘッドフォンを使用した。A児は普段から自宅でオンラインゲームをやっており、その中では友達と流暢に会話している様子がある。ゲーミングヘッドフォンを活用することで、より自分が得意とする形で活動ができるようにした。また、録画機能を積極的に活用することで、自分自身でその録画の様子を振り返ったり、担任教師等に見せることによって情報の共有を図ったりした。

3.4.4 分析方法

オンライン交流学習の様子を画面録画して分析したり、実生活の様子を行動観察したりし、目標に即して学級担任、通級指導教室担当、専科職員(家庭科・音楽)、筆者らで評価する。

3.4.5 目標①「相手の方を見る意識」について

(1) 録画データの分析から

図2はA児が1回目の授業の中で教師と日常会話

についてやり取りをした際に主にどこを向いて話をしてきたのかという表である。日常会話でのやりとり部分(1分30秒)を5秒毎ずつ分け、その5秒の中で主にどこの方角を向いていたかを測定した。A児は自分の意見を言ったり、教師の話の聞いたりしたが、全体的にやり取りを通して、視線が定まらない状態であった。

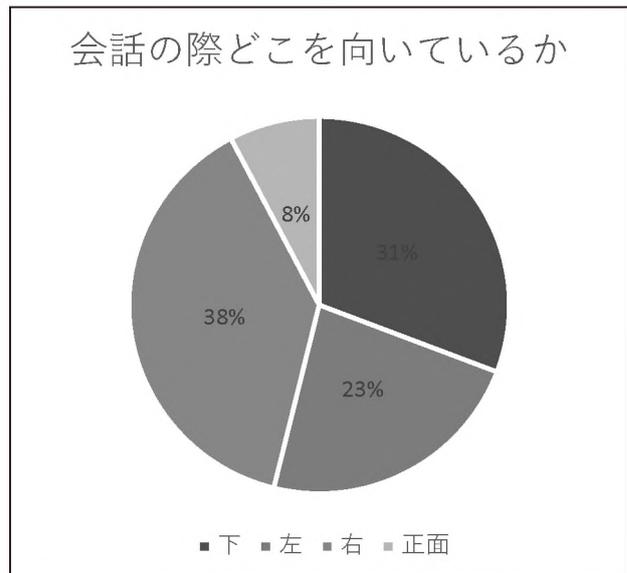


図2 会話の際どこを向いているか

(2) 指導上の工夫・配慮について

2～5回目の授業にかけて、お互いに質問をする活動を通して、相手の方を見て話す練習を行なった。タブレットのカメラのところにシールを貼り、そこを見ることで視線が相手に向くように声をかけた。画面の中に映し出される人物が常に1人のため、視覚的にも対象が明確となり、相手の方を見るという練習を効果的に行うことができた。

(3) 結果と考察

表5は学級担任に行ったアンケートである。オンラインの活動で自信をつけたことで、対面でも相手の方を見て話をするができる場面が増えた。

例えば、通常の学級で毎日帰りの会の前に行う「ひと言日記」では、ノートに書き上げ次第、担任教師に提出に行き、20秒程度の会話のやり取りをする。そのような場面は、オンラインで練習したことをA児が発揮できる場となり、担任もA児の成長を毎日確認できる機会になっていたと思われる。

表5 学級担任へのアンケート

実施日	質問	回答
令和4年7月4日	教師と目線を合わせて(相手の顔を見て)相手の話を聞くことができる	() 休み時間等にできている () 授業中の活動にできている (○) あまりできていない
令和4年10月13日	教師と目線を合わせて(相手の顔を見て)相手の話を聞くことができる	(○) 休み時間等にできている (○) 授業中の活動にできている () あまりできていない

3.4.6 目標②「傾く・相槌を打つなどの反応」について

(1) 教師とのオンラインでの練習

A児は6・7回目授業の中で、傾いたり反応したりすることを「質問タイム」という活動を通して練習をした。画面に自分が映し出されていることで、傾くといった事柄が、目で見て分かり、自分の様子を振り返ることができ大変有効であった。

(2) 他校の児童とオンラインの場面

A児は友達ともやり取りにおいて、画面上ではあるが、相手の発表や伝えたいことに対して、傾く場面が見られた。図3は実際にやり取りをしている様子である。ゲーミングヘッドフォンは意欲向上のために用いた支援であったが、相手の声を正確に聞きとることに對しても有効であった。



図3 実際の写真

(3) 学級等での対面の様子

7月に行ったA児への事前アンケートの中で、

「相手と会話をする際に傾いたりすることができていない」と回答していた。行動観察からも、普段相手とやり取りをしていく中で傾きを見ることはできなかった。しかし授業を通して、傾くことの必要性を学び、オンライン上や日々の生活の中でも自然に傾くことができていたことが表6のA児へのアンケート調査からわかる。

表6 A児へのアンケート

実施日	質問	回答
令和4年7月4日	話を聞くときにうなずきながら話を聞くことができますか	() 誰とでもできる () 友達とならでき () 先生ともできる (○) 誰ともあまりできない
令和4年10月13日	話を聞くときにうなずきながら話を聞くことができますか	(○) 誰とでもできる () 友達とならでき () 先生ともできる () 誰ともあまりできない

(4) 通級指導教室での様子

表7は通級指導教室担当に行ったアンケートである。7月に行ったアンケートでは、傾くことは通級指導教室での学習においても、オンラインでの実践練習での結果、反応を示すようになったことが示されている。

表7 通級担当へのアンケート

実施日	質問	回答
令和4年7月5日	教師とコミュニケーション(会話など)をとる際に、相槌を打つことができる	1よくできる 2ややできる 3あまりできない 4できない
令和4年10月28日	教師とコミュニケーション(会話など)をとる際に、相槌を打つことができる	1よくできる 2ややできる 3あまりできない 4できない

(5) 全般的なやり取りの様子

表8は行動観察から把握したA児の様子である。A児はオンラインの交流学习を通して、他者とのやり取りにおいて多くの伸びがみられた様子が表からも示されている。

A児はオンラインの学習環境では意欲的に学習に

取り組み、のびのびと活動することができた。オンラインの環境で自信を付けたことで、通常の学級の友達に対しても積極性が見られた。

表8 行動観察の様子

日付	形態	内容
9月13日	対面	・学級の友達に「僕にもやらせて」と、友達が自作したタブレットのプログラミングゲームをやりたいと声を掛ける。
9月16日	対面	・家庭科の時間に、ミシンの使い方がわからない友達に、「こうやってやるんだよ」と声を掛ける。
9月20日	オンライン	・話したことの無い他学年の先生と、オンライン越しに一緒にゲームを楽しむことができる。
9月29日	オンライン	・授業の感想を「チャットで書きたい」と話し、自分の入力したい文字を記入することができる。
10月26日	対面	・学級でクイズ大会を行い、グループで考える時間が与えられると、前の席の児童と話し合い、一緒にクイズを考える。
11月2日	対面	・休み時間に、タブレットをやっている友達のところに行き、その画面の内容についてつぶやいている。

3.5 A児の総合考察

3.5.1 ゲーミングヘッドフォンの活用

今回のオンライン交流学習ではA児が、オンラインゲームを好むことから、ゲーミングヘッドフォンを活用した。家庭での友達とコミュニケーションを取るときと同じような雰囲気を出せたことで、表出に対しても対面で行う以上に自信をもって相手に伝えることができた。また、その機種の種類上周りの音がほぼ遮断されるため、活動に集中することができた。A児は他者の視線を気にすることがあるため、今回のような学習形態において、より個別な環境を演出できるゲーミングヘッドフォンは大変有効であった。また、A児へのアンケートでもゲーミングヘッドフォンに対して大変好意的な意見を回答していた。

3.5.2 動画を活用した他の教師からの評価

オンラインの中で生き生きと活動している様子を

家庭科専科の教師が見たことにより、A児への評価が変わっていった。動画を見ることで「この子はこんな表情をするんですね。いつも授業をしている時の様子と全く違います。」と話していた。その後、その専科の教師は廊下などですれ違った時は、いつも以上に明るく声をかけることが多くなった。また英語専科の教師も動画を見て「とても楽しそう。クラスでは見られない表情です」と言っており、A児に対する見方が大きく変わった。

3.5.3 チャットやスタンプの活用

A児は学習の最後に行う振り返りの中で、チャットを打ったりスタンプを送り合ったりするを楽しんだ。お互いに送信したスタンプから会話が広がり、きっかけにもなったので、今後も音声だけによるやり取りだけでなく、ICT機器を活用したコミュニケーションを積極的に取り入れていきたい。(図4)

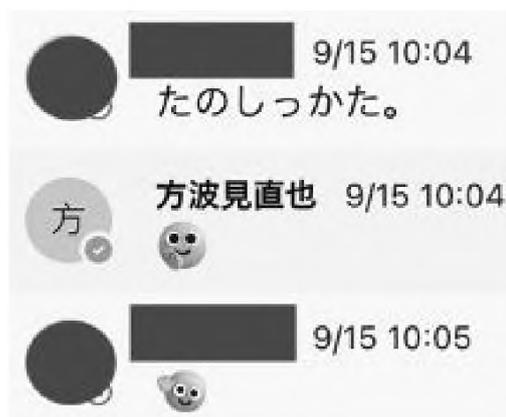


図4 チャットの様子

3.5.4 まとめ

A児はオンラインの交流学習を通して、日常の学級生活においても、やり取りに対して積極的になったり、自分自身に自信が付いたりした。

A児本人に行ったアンケートからも、「クラスの友達と話をするか」との質問に対して、6月は「あまり話さない」としていたが、10月には「ふつう」と○をつけたことから、自信が付いたことを読み取ることができる。

以上のことから、A児が興味関心のある題材を活用してやり取りやコミュニケーションの活動をする重要性が指摘された。

4 研究Ⅲ－B児について

4.1 B児のアンケート調査から

B児は、学級で友達と楽しくやり取りをすることは非常に好む。しかし、学級担任や専科職員といった、人数がたくさんいる場所で大人と会話することに苦手意識がある。理由は、本人の聞き取りの中で「緊張するから」という回答があった。

4.2 B児の様子について

発達検査においては言語理解・ワーキングメモリーが高く、知覚推理・作業速度に苦手が見られる。また、場面緘黙や自閉的傾向が見られる。

行動観察からは普段の学級では友達とはとても楽しく過ごしている。通級指導教室でものびのびと過ごし、通級担当に対しても、緊張する様子はなく楽しく過ごしている。一方、学級担任（以下、担任）に対しては、事務的な事柄は伝えることができるが、自分から進んで話しかけたりする様子はなく、休み時間と授業中でとても変化が感じられる様子である。また、専科職員など、普段関わりが少ない教師に対しても消極的である。

4.3 授業実践

4.3.1 目標—教師・大人との会話の際に緊張感を減らすことができる。

4.3.2 内容と方法—自立活動 1回20分を 8回実施する。以下は20分1単位時間の主な流れである。授業では、主に「質問タイム」と「ミニゲーム」を行う。質問ゲームでは、相手の方を見ることや頷くことを意識的に行い、ミニゲームでは、人と関わるのが楽しくなるように活動を行なっていく。以下は指導計画である。(表9)

表9 B児の指導計画

回数	指導日	活動のねらい
1回目	9月7日	パソコンの操作を覚えよう
2回目	9月13日	担任の先生と交流をしてみよう1
3回目	9月15日	相手の方を見て話そう
4回目	9月20日	担任の先生と交流をしてみよう2
5回目	9月22日	うなずきながら聞いてみよう
6回目	9月29日	クラスの友達と交流しよう
7回目	10月6日	専科の先生と交流してみよう
8回目	10月25日	担任の先生と交流をしてみよう3

4.3.3 指導の工夫

B児は対面でのやり取りを苦手に行っているため、チャットやスタンプを活用したやり取りも取り入れた。また、ゲーミングヘッドフォンを使用することで、小さな声でも相手に的確に自分の声を伝えることができるようにした。

4.3.4 結果と考察

単元当初の様子は、対面でも担任と話をする際は緊張する様子が見られていたが、ビデオ通話を通して同様に緊張が見られた。

B児はビデオ通話の画面をオフにしたり、画面の外に出たりと、顔を画面に映し出すことを拒んだ。筆者とのビデオ通話では顔を出すことに抵抗をもっていなかったが、親しくない大人との対話では、まだ自信はないようであった。しかし、顔は出さなくても、チャット機能を活用しての交流を楽しむ様子が見られたことが大きな成果である。B児は毎回の交流の中で、自分の好きな言葉をチャットで打ち込んでおり、その言葉に担任が反応し、やり取りを行う場面が見られた。

また、担任はオンラインの交流学习を通して、B児の学級での変化を次のようにアンケートで回答している。「まだまだ大人とコミュニケーションを取ることに抵抗はあるが、4月の頃に比べるとこちらの言葉かけに、返答する際の言葉数が増えている。また、憶測にはなるが、返答の際には、より表情が出るようになっていく。担任が言う冗談も笑っている場面が増えている。そういった意味では、今回コミュニケーションをとるために1つの手段としてビデオ通話等を用いたオンラインツールの活用は有効だったと思う。」このことから、対面でもなくても、ICT機器を活用したやり取りに効果があることが示された。

また、表10は、音楽専科でB児と関わっている教師が、オンラインで交流した後の感想である。オンラインで交流することで教師にとっても新たな児童理解につながっていることがわかる。

表10 専科職員の感想

授業では話したことがなかったが、楽しそうな一面を初めて見ることができた。	専科担当として、AL・ADHD等通級指導教室に通っている児童の実態をよく知ることができた。	オンラインの交流を通して活動することで、普段の授業でも声かけやすくなった。
--------------------------------------	---	---------------------------------------

専科職員の授業をする際は、筆者も横に座りサポートをした。筆者が横に座るとビデオをオフにはしたがらなかった。担任とのやり取りでは3回目の交流から、教師も横に座ってサポートをしたが、B児はカメラをオンにはしたがらなかった。一方で、専科職員との交流は、初めての授業の際に、横に筆者がいてサポートしたため、カメラをオンにしても活動が行えた。

4.4 B児の総合考察

B児はオンラインを通して担任や専科職員との交流を主に行った。対面であれば緊張して中々話ができない児童であったが、画面越しのやり取りということで、交流をすることができた。「オンライン交流をすることで、担任や専科に対する緊張は少し減った」とアンケートで回答しており効果があることが示された。一方で、B児はカメラに自分の顔が映ることを嫌がり、その理由は「恥ずかしい」ということであった。今後はさらに回数を重ねることや学級の友達と一緒に担任と交流をしてみるなどの試みをしていきたいと考える。

5 研究Ⅳ－C児について

5.1 C児の様子から

C児本人へのアンケート調査からは、自分の伝えたいことを相手に伝えることをとても好む傾向が示された。しかし、自分の話ばかりになってしまい、会話の順番や相手を意識することを苦手としている。

発達検査からは、言語理解とワーキングメモリーが低く、知覚推理と処理速度が高い。また、自閉的傾向がみられる。また、行動観察からは自分の伝えたいことを伝えることにとっても時間がかかる。話すときに上を見上げる様子が伺えた。

5.2 授業実践

5.2.1 目標—順番を守って話をするができる。

5.2.2 内容—質問ゲームを通して、順番を守って話をするようにする。以下はC児の指導計画である。

表11 C児の指導計画

回数	指導日	活動のねらい
1回目	9月15日	オンライン交流学習をしてみよう
2回目	9月21日	順番を守って話そう
3回目	9月28日	丁寧な言葉遣いをしよう
4回目	10月5日	順番を守って話そう

5.2.3 指導の工夫

C児がより意欲的に取り組めるようゲーミングヘッドフォンを活用した。またICT機器に対する興味が高いため、オンラインの交流学習を取り入れることで、苦手な順番を守ることに對しても、意欲的に取り組めるのではないかと考えた。

5.2.4 結果と考察

C児はオンラインの学習で順番を意識して話す学習をした。ビデオ通話機能により話す対象が明確となりC児の意欲に繋がった。また、ICT機器に興味があるため「楽しかった。もっとやりたかった。」と話しており、積極的に学習することができた。担任もアンケートで、「友達同士のトラブルが減った。友達と仲良く過ごせることも増えた」と回答していた。

6 実践研究Ⅴ－D児について

6.1 D児の様子から

D児本人のアンケート調査からは相手を意識した言葉遣いができない、誰に対しても友達口調になってしまうとの自己評価であった。日常的にTVゲームをすることを好む傾向にある。

発達検査からは言語理解とワーキングメモリーが低く、知覚推理と処理速度が高い。また、ADHD傾向と自閉的傾向がみられる。行動観察からは集団の中で指示を聞くことが苦手である。自分が思ったことは全て口に出してしまう。そのため友達とトラブルになってしまうこともある。落ち着いて話をすれば状況を理解することがよくできる。

6.2 実践研究

6.2.1 目標—丁寧な言葉遣いをすることができる。

6.2.2 内容—質問ゲームを通して、丁寧な言葉遣いをする練習をする。以下はD児の指導計画である。

表12 D児の指導計画

回数	指導日	活動のねらい
1回目	9月15日	オンライン交流学習をしてみよう
2回目	9月21日	順番を守って話そう
3回目	9月28日	丁寧な言葉遣いをしよう
4回目	10月5日	丁寧な言葉遣いをしよう

6.2.3 指導上の工夫

普段から教師の指示を聞くことが苦手であるため、話し手をより意識しやすくなるオンライン交流学習を取り入れることで、注意を高めることができると考えられた。また、声をかける際も、ヘッドフォンを通して、指示を聞くため、誰から誰に対しての指示なのかを明確にできるようにした。

6.2.4 D児の授業の結果と考察

D児はオンラインの学習で相手を意識した話をすることや集中して話をするを学習した。通級指導教室担当も「対面で話しているよりも画面があることで注視ができています」と肯定的な意見を聞き取りに対して回答していた。また、授業後の行動観察からも、相手を意識して友達と話をする時と、教師と話をするときの言葉遣いの違いを理解して話ができていた。

7 総合考察

7.1 成果

7.1.1 オンラインの交流学習の有用性

通級指導教室を利用する児童の中には、他者に対して消極的、一定の誰かと話す際に緊張感がある、会話の順番を守ることが苦手、話を集中することが苦手、話したい気持ちはあるが学級で話すことに抵抗がある等のコミュニケーションに関する多様な課題を抱えている場合が多い。本研究の特色は直接的な対面コミュニケーションではなく、オンラインという間接的対面コミュニケーションを取り入れた点にある。

触れてきたように、どの児童も生き生きと取り組む様子が見られ、その積み重ねにより自信が高まり、通常の学級という日常の直接的な対面コミュニケーションの場にも般化したと考えられる。

7.1.2 通常学級との連携への示唆

学級では自分自身を表現することが苦手な児童が、画面の中で楽しそうにやり取りをし、その録画の様子を、教師が見ることで、その児童への「見方」が大きく変わった。「個別の指導計画」をはじめ通級指導教室と通常の学級の連携が指摘されている。実際は、連絡ノートや隙間時間に話題の共有をすることが一般的である。しかし、このオンラインの交流学習であれば、実際の録画の様子を見ること

ができ、その様子は普段の学級では中々見ることでできないものである。その動画で生き生きと活動する様子を見て、普段の授業でも声が掛けやすくなったり、児童自身も「この録画の様子を先生が見てくれている」と意識することで、これまで以上に、学級でのびのびと過ごすことができたりする姿が確認された。

以上のように、録画機能を活用する連携の可能性が示されたと言えよう。

7.1.3 ICT機器の活用性

ヘッドフォンを活用することや、やり取りにおいて音声だけに限定するのではなく、チャットやスタンプを活用した。実際に、児童が送信したスタンプから会話が広がる場面が何度もあった。コミュニケーションを活性化させるために、オンラインによる直接的な対面会話に限ることなく、ICT機器を活用することによって、間接的コミュニケーションで児童の意欲を引き出すことができたことは、コミュニケーションの指導上の工夫として示唆に富んでいた。

7.2 課題

7.2.1 顔を映し出すことへの抵抗感への対応

自分の顔を映し出すことに抵抗感のある児童にとっては、顔を写さなくてもチャットやビデオオフなどでやり取りができるというメリットがある。児童の様子に応じてカメラのオンオフの自由度を高めたりする必要性が示唆された。

7.2.2 通常の学級とオンラインを行う際の課題

特別支援学級や通級指導教室では活動しやすい内容であったが、通常の学級との交流となると予定を合わせることや1対30の構造になりがち等の課題も多い。学校内の交流学習を推進するためには、特に親しい友達や所属する班やクラブ活動の友達から始める等の方法の検討が求められる。

7.2.3 連絡調整等の課題

他校とのやり取りにおいては連絡の仕方やスケジュール調整が課題である。オンラインの交流学習はその性質上、同じ教材を双方にそれぞれ用意しなくてはいけない準備の大変さや学校のタイムスケジュールの違いなど密に連携を取り合う必要がある。どの学校・どの先生でも取り入れていくことができるよう、活動内容や流れをシンプルにしていく

必要がある。

また授業を行う指導者もオンライン交流学习を行う上でICTを活用する技術が必要である。部屋の立ち上げ方やハウリングをした際の対策、録画の仕方や画面共有など、お互いが同程度の知識をもっていないと成り立たない場面もあるため配慮や留意が必要である。

8 倫理的配慮

本研究における質問紙調査、ビデオ検証では、事前に協力者に研究の趣旨を説明し、協力者の同意と許可を得た。研究の趣旨や目的、研究協力者の個人情報の保護、権利の保障、データの厳重な取り扱い、研究成果の公表方法等を説明し、承認を得た上で、研究に協力してもらった。

謝辞

本論文を執筆にあたり、多くの方々にご協力をいただきました。オンライン交流学习という性質上、授業者一人だけでは設定や接続などができず、多くの方にご協力いただきました。携わっていただいたすべての方に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 新井英靖・佐藤まゆみ（2014）「特別支援教育1から始める自立活動コミュニケーション力を育てる授業づくり」明治図書
- 榊原洋一（2016）「発達障害の子どもたちをサポートする本」
- 佐藤慎二（2022）「通常学級の『特別』ではない支援教育」東洋館出版社
- 庄子寛之・深見太一（2020）「子どもがつながるオンライン学級遊び」学陽書房